

法政史学 第20号発刊の辞

岩生, 成一 / IWA0, Seiichi

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

1968-03-20

法政史学 第二十号発刊の辞

わが法政大学文学部史学科の研究機関誌「法政史学」も、ここにその第二十号を刊行することになった。今までの所、年刊であるから、創刊以来歳月を経ること二十年、これを人生に譬うれば、二十歳、正に青年に達したわけで、これから真に充実した活動に進むべき時点にさしかかったのである。この二十年間に、わが国も終戦直後の荒廃からすっかり立直って、今や目覚ましい発展の段階に踏み入っている。わが学界においても、史学の研究はいよいよ精緻となつて、その智識の普及は刮目に価するものがあり、全国各地で発行される史学関係の研究誌の数も非常に多くなっている。この間にあって、わが「法政史学」は、この二十年の歳月に、籍を本学史学科に連ねる教官、大学院並に学部卒業生、在学生及び通信教育部の学生が挙つて一丸となり、それぞれ極めて困難な研究条件をよく克服して研究に精進し、その真摯な成果は、巻号を重ねるごとに、その内容に益々深みを加え、その対象範囲は、広く東西に亘り、上代より近代に、あるいは政治経済思想宗教、さては海外交渉から考古学など各方面の問題を網羅し、これを弘く学界に問うて、今や「法政史学」は専門學術雑誌として毫も他に遜色ないばかりか、斯界の高き評価さえかち得ていると見るのは、あながち関係者の自負でもあるまい。

殊に本学史学科の学風は、かつて第十号発刊の辞にも唱われているように、時流に阿ねらず、左に傾かず、右に偏らず、史学本来の面目に徹して、常に中正にして着実なる史風を堂々樹立せんとするにあつて、全員同心協力して今日に及んで、広く全国各地に散在する法政大学史学関係者の研究発表の場として活用されて来た。このよき伝統に立脚し、二十年にわたつて積み重ねられた、この成果に踏まえて、今この二十号発刊を機に、さらに一層の努力と工夫を重ね、今後の大いなる発展飛躍を期するものである。

なお「法政史学」の順調な発刊と発展の陰に、本学本部並に通信教育局より寄せられた一方ならぬ援助に対して、深謝しその好意に対しても責任の重大なことを痛感する次第である。

昭和四十三年一月

会長 岩 生 成 一